

『特別の教科 道徳』における指導と評価の一体化

～「評価の観点」と「評価の視点」から考える～

京都産業大学 柴原 弘志

1 全面実施を迎えて

「道徳の教科化」を最大限に生かす!!

⇒ 道徳教育の実質化・更なる充実

◎ カリキュラム・マネジメント ← 学校評価による検証(→諸計画の実効性)

(特に量的確保と質的改善・充実)

道徳科の目標やそれぞれの時間のねらいの実現へ向けた効果的な授業づくり

そのためにも ◇ 「曖昧なねらい」からの脱却が重要

この時間にどういった学習活動を通して、何をねらっているのか明確化・具体化する!!

↑ ↑

学習状況(学習活動への取組状況及びその成果)や道徳性に係る成長の様子を具体的に想定する!! ⇒ 指導と評価の一体化

2 「評価の観点」と「評価の視点」から考える質の高い学習指導と評価

◎ 趣旨を踏まえた適切な評価 (◇対教育活動 ◇対児童生徒)

学習活動の改善・学習や道徳的成長への意欲の向上⇒豊かな道徳性の確かな育成

◇道徳教育・道徳科の授業

←「評価の観点」

◇学習状況・道徳性に係る成長の様子

←「評価の視点」 ⇔授業改善

◇「評価の視点」の文末を替える⇒「評価の観点」として捉える

⇒⇒ 道徳科における指導と評価の一体化

☆ 道徳科における学習状況等に関する評価の視点例

・学習活動において児童生徒が、道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、

◇ 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

- ① 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているか
- ② 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直しているか
- ③ 道徳的な問題に対して、自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めているか
- ④ 道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているか

◇ 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか

- ⑤ 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしているか
- ⑥ 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしているか
- ⑦ 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしているか

といった(視)点を重視することが重要(「解説 道徳編」)

↑ ↑ ↑ ↑

児童生徒の学習状況等の姿・ワークシート記述内容の評価分析の視点

授業中・ワークシート等 ← 受容語・評価語

- 例 ・ 自分の事として考えられたね ・ 他の人の意見と比較しながら発言できたね
 ・ これからの自分の生き方に触れながら振り返ることができたね

- 自分の生活や体験からの思考・振り返り ← 一本線
 ○他の人の意見を踏まえた思考・振り返り ← 波線
 ○これからの自分の生き方に触れた思考・振り返り ← 二重線

「評価のものさし」を教師だけが持っていてよいのか?!!

- ◇ 「何を学ぶのか」 + 「どのように学ぶのか」 = 共に児童生徒の重要な学び
内容知 + 方法知 の学習 ⇒ 質の高い学習活動 ⇒ 豊かな道徳性の確かな育み

実践例

- ☆ 振り返りカード(シート)の項目例 自己評価例(あくまでも児童生徒の学習活動)

- ・登場人物を通して自分が考えたりした内容を発表することができたか
- ・発言している人の考えを自分と比べて聴き、理解しようとすることができたか
- ・他の人の発言に関連させて、自分の考えを理由をつけるなどして、詳しく語ることもできたか
- ・自分の生活や生き方について考えることができたか

- ☆ 「考える」・「語る」・「記述する」ポイント(小中の学年段階に応じた項目を系統的に学級掲示)

次のような観点を意識しましょう!!

- | | |
|--------------------------|-------|
| ・めあて・学習課題に | 触れながら |
| ・登場人物と自分を重ねたり、比較したりしたことに | |
| ・根拠・理由や具体例に | |
| ・これまでの自分の生き方に | 触れながら |
| ・これからの自分の生き方に | |
| ・自分の考えなどの変化に | |
| ・他の人の考えなどに | 触れながら |

☆ 学習指導過程や指導方法に関する評価の観点例

- ◇ 学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の(人間としての)生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか
- ◇ 発問は、児童生徒が(広い視野から)多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか
- ◇ 児童生徒の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童生徒の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか
- ◇ 自分自身との関わりで、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか
- ◇ ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童生徒の実態や発達段階にふさわしいものであったか
- ◇ 特に配慮を要する児童生徒に適切に対応していたか

3 「特別の教科 道徳」における「主体的・対話的で深い学び」

主体的な学び (「中央教育審議会答申」平成28年12月)

児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習

各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすること

対話的な学び

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすること

深い学び

道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習

道徳科における「見方・考え方」(⇒深い学びの鍵となる)

「様々な事象を、道徳的諸価値を基に自己との関わりで(広い視野から)多面的・多角的に捉え、自己の(人間としての)生き方について考えること」

◎「指導計画の作成と内容の取扱い」(配慮事項等)(重要 下線部は追加された内容)

他の教師との協力的な指導、計画的・発展的な指導、補充・深化・統合の役割を果たす指導

↓ ↓

◇**質の高い多様な指導方法への改善**(『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告))等

(「主体的・対話的で深い学び」⇒ ねらいの実現に効果的で成長を実感でき、学びがいあり!!)

↑ ↑ **ノートやワークシートファイルなどの活用(ポートフォリオ等評価)**

「児童(生徒)が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、児童(生徒)自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。(また、発達段階を考慮し、人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとするためのよさについて、教師が生徒と共に考える姿勢を大切にすること。)」(学習指導要領)

「児童(生徒)が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育てることができるよう、自分の考えを基に話し合ったり(討論したり)書いたりするなどの言語活動を充実すること。(その際、様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方を生み出していくことができるよう留意すること。)」(学習指導要領)

◎ 「児童生徒が主体的に深く考える」ようになるためには?!

⇒ 考える必然性(考えたくなる・考えざるを得ない)のある発問づくり(P6 参照)

◎ 「児童生徒が本音で語り合える」ようになるためには?!

⇔ 「聴き合える」集団づくり・傾聴し発言等を生かせる教師

児童生徒が主体的に自己を見つめ深く考え、感じ、聴き合い、語り合う学習・姿勢づくり

「主体的に深く考え、語り合い、学び合う道徳の授業」⇒道徳的行為実

キーワードは「**学習状況**」「**子どもに聴く**」「**言葉(言語)化**」「**語り合い**」
(授業改善) (観察と言語分析) (メタ認知・共有化・批判的思考力)

↓

主体的な学び・対話的な学び⇒深い学び

4 「特別の教科 道徳」における授業づくりと評価を考えるための基本事項

◎「特別の教科 道徳」の目標 (極めて重要「主体的・対話的で深い学び」は基本)
「(前略)よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の生き方(人間としての生き方)についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

◎「特別の教科 道徳」の内容 (「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」以下「解説 道徳編」)
「教師と児童(生徒)が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に磨き合い、その実行に努めるための共通の課題である。」

学習評価の基本的な考え方 (「学習指導要領 総則」の「教育課程の実施と学習評価」)

「学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」

◇「授業に対する評価の基本的な考え方」(「解説 道徳編」)

「児童生徒の学習状況の把握を基に授業に対する評価と改善を行う上で、学習指導過程や指導方法を振り返ることは重要である。(中略)明確な意図をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な児童生徒の学習状況を想定し、授業の振り返りの観点を立てることが重要である。こうした観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現することになる。」

◎「特別の教科 道徳」における評価(学習指導要領 下線部は追加された部分)

「児童(生徒)の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。」

◆ **学習状況(学習への取組状況及びその成果)等の評価** → 授業改善

- ・道徳性の諸様相である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のそれぞれについて分節し、学習状況を分析的に捉える観点別評価を通じて見取ろうとすることは、児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目的とする道徳科の評価としては、妥当ではない。
- ・道徳科については、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める」という学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ることが求められる。(「解説 道徳編」)
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくりなまとまりを踏まえた評価とする。
- ・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行う。
- ・学習活動に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する。(「解説 道徳編」)
- ・個人内評価を記述で行うに当たっては、その学習活動を踏まえ、観察(発言が多くない・記述することが苦手な児童生徒もあり、発言や記述ではない形で表出する児童生徒の姿に着目することも重要)や会話、作文やノートなどの記述、質問紙や面接などによる方法を工夫
- ・組織的、計画的な評価(複数の目で見取り、共通認識)⇒学習評価の妥当性、信頼性等の担保
- ・発達障害等のある児童生徒や海外から帰国した児童生徒、日本語習得に困難のある児童生徒等に対する配慮すべき内容等を学校や教員間で共有(ユニバーサルデザイン)

「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)」

- ・一人一人の児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子について特に顕著と認められる具体的な状況を記述する。(⇒児童生徒や保護者における理解)

これまでにもみられる実践事例『道徳(科の時間)に関する記録欄(通知表等)』

- ◆「話し合い活動では、積極的に自分の考えを述べるだけでなく、友だちの多様な意見を頷きながら聞き、自分の生き方についての考えを深められるようになりました。」(学習状況中心)
- ◆「教材の中の登場人物の迷いや悩みを自分のことのように捉え、そうした場ではどのように判断するのがよいことなのかを根拠に基づいて考えられるようになりました。」(学習状況中心)

+ + + + +

- ◇『はしの上のおおかみ』での学習では、主人公のおおかみと同じような動作をすることから、親切にする気持ちのよさを感じ、これから身近にいる人たちに親切にしたいという思いをより深くもつことができるようになりました。」
- ◇「教材の中の手品師の生き方から、誠実に生きることを自問自答する姿がみられました。学年末には『自分自身に対しても誠実に生きることが大切だ』と記述するまでになりました。」
- ◇「真の友情について考えた学習では、皆の意見を参考にしながら深く考え、仲良しだけの関係から、互いを高め合い成長できる関係であるという理解を深め、これからはそうした友達関係をつくっていこうとする記述がみられるようになりました。」
- ◇『主として人との関わり』に関する学習では、体験を基に自分を深く見つめ、自分とは異なる意見からも学ぼうとする意識をもち、特に相手のことを思いやることの大切さの理解を深め、謙虚な心・広い心で相手を認め、尊重していこうとする発言や記述がみられました。」等々

⇒ ◆学習活動に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、評価の視点例を踏まえた評価 + ◇児童生徒や保護者にその学習状況や道徳性に係る成長の様子が伝わる評価

一般的には (← 目標・内容等を踏まえ、児童生徒や保護者の理解を考慮し、評価の趣旨を実現)

「～の学習活動への～といった取組状況のもと、多様な感じ方や考え方の交流を通して、～の観点から～に気づき、～という考え(理解・心情)を深めるとともに、～への憧れを強め、～しようとする発言・記述がみられるようになりました」等々 (⇒その実践研究の蓄積とその成果の共有化)

質の高い学習指導と評価の実現には ◇「曖昧なねらい」からの脱却が重要

あれもこれもではなく、この時間にどういった学習活動を通して、いったい何をねらっているのか明確化・具体化する

【指導と評価の一体化という意識と具体的スキルの修得】

(もちろん、すべてが他の教科と同質ということではなく、長期的・継続的評価意識やスキルも必要) ただし、あれもこれもはできない! (評価の理論的可能性と実際の評価活動の実現性は異なるもの) 各学校現場において、実践を交流し、できるところからできることを着実に(限界の存在を前提としつつ)

評価の方法例(基本は観察と言語分析)

誰が・・・授業者、児童生徒、他の教師等(児童生徒による評価(受け止め)を生かす) どのようにして・・・授業中の観察・授業中の発言や記述内容の分析(ノート等の活用)

児童生徒による自己評価(振り返り等)や授業アンケート等の活用

他の教師による評価の活用

授業前後の観察・授業後の面談や記述内容等の分析

「ポートフォリオ」等を生かした評価(⇒ノート・ファイルの活用等) etc

なお、道徳性の高まりや変容は、比較的短時間に現われるものもあれば、長期にわたる指導にまつものもある。多面的・組織的・計画的・継続的評価も必要である

個人内評価として、道徳的成長を認め励ますものにしたい!!

5 今後さらに充実させたい取組

- ◇教材や中心発問等の系統性・発展性の検討と小中連携に基づく取組の充実(ex 重点項目)等々
- ◇道徳教育・道徳科の授業や評価に対する保護者等の理解を促進する取組
- ◇各学校における組織的・計画的な取組の充実と具体的な評価方法の蓄積と交流・共有・改善

↓ ↓ ↓

我が国の道徳教育そして「道徳科」の特質から求められる学習指導のあるべき姿を、正しく共通理解して、本質的な部分から改善・充実を図り、道徳教育の真の実質化を!!

参考

「特別の教科 道徳」の授業づくりのために

◎「特別の教科 道徳」の目標に対する正しい理解

(「主体的・対話的で深い学び」を基本とする学習活動)

「特別の教科 道徳」(以下「道徳科」という)の授業づくりや評価の在り方について考える上で、最も重要なことは、「道徳科の目標」すなわち「(前略)よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」(学習指導要領)

という内容について正しく理解し、実践し、評価し、改善を加えていくということ!!

◇「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめる」ということ

誰による理解の基に見つめるのか?! 児童生徒一人一人の理解から ⇒ 厳密には、皆異なる!!
1時間の授業の中で何度見つめるのか?! 一度とは限らない!!

「自己内対話」=自分が自分に自分を問う(道徳科で特に大切な学習活動)

「道徳(どうとく)」に関する学習は、その特質上、「どう説く」すなわち教えられて分かる学習指導もさることながら、「どう解く」すなわち自ら求めて(主体的探求)解かる(納得解)学習指導が極めて重要

発問の4類型 共感的発問・分析的発問・投影的発問・批判(範例)的発問

永田繁雄(東京学芸大学)

◇「道徳的諸価値についての理解を基に、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考える」ということ

一面的、表層的にならない考察。自分とは異なる感じ方・考え方等の交流による考察を!!

多面的に考えるとは?! 道徳的価値そのものが本質的に有している特性等の観点から考える。

例 「友情」

仲良くする、助け合う、理解し合う、信頼し合う、学び合う、励まし合う、高め合う etc

多角的に考えるとは?! 上記下線部以外の観点等から考える。

例 異なる立場から考えたり、時間や空間を変えて考えたりするなど、考える観点や条件を変えて多様な角度から考えること(〜と違ってAさんの立場だったら・〜しなかったとしたら等)
そのためにも、児童生徒の発言を傾聴して受け止め、

その発言等を生かした重層的発問(「問い返し」「切り返し」等)を工夫する。

確認(立場・対象) 根拠・理由 言い換え 比較 具体化(例示) 批判・反例(切り返し⇒本音)

◇「道徳的諸価値についての理解を基に、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習」ということ(下線部を相互に関連付ける ⇒ より深い理解・考え)

「道徳的価値や人間としての[自己の]生き方についての自覚」を深める学習

道徳科における発問をより効果的なものにするためには?! 主体的な学び

考える価値・必然性のある問いづくり(→広い視野から多面的・多角的な思考) ⇄ 対話的な学び

- ◇ 考えたくなるような問い 考えざるをえない問い
 - ◇ これまでには考えたことのないようなことや観点から考えようとする問い 深い学び
 - ◇ 他の人の考えを聴きたくなるような問い
 - ◇ 自問・内省できるような問い
- (新たな視点の提示、概念くだき、問い返し、揺さ振り、価値葛藤、心理的葛藤等)
- ◇ 自己の生き方や人間としての[自己の]生き方について深く考えられる問い

『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告） H28, 7, 22』

（学習指導要領全体の改訂における特別支援教育に関する内容）

- 現在中央教育審議会で行われている、学習指導要領全体の改訂についての審議の中でも、小学校、中学校等における特別支援教育の在り方について検討がなされており、その中で、困難さの状況に応じた指導や評価上の配慮の在り方について議論されている。
- 具体的には、育成すべき資質・能力の育成や各教科等の目標の実現を目指し、児童生徒の十分な学びが実現できるよう、学習の過程で考えられる「困難さの状態」に対する「配慮の意図」や「手立て」の例を示すことなどについて検討されており、道徳科においては、「相手の気持ちを理解することが苦手で、字義通りの解釈をする場合には、他者の心情を理解するために、役割を交代して動作化や劇化した指導を取り入れる」ことや、「話を最後まで聞いて答えることや順番を守ったりすることが困難であったり、衝動的に行動し、他者の行動を妨げてしまったりする場合、注意が持続できるよう、適度な時間で活動を切り替えるなどの配慮をする。また、他の児童からも許容してもらえそうな雰囲気のある、学級づくりにも配慮する」ことが例として示されている。

（発達障害等のある児童生徒に対する道徳科の指導及び評価上の配慮）

- こうしたことを前提としつつ、発達障害等のある児童生徒に対する道徳科の指導及び評価上の配慮について検討するため、本専門家会議では、発達障害等のある児童生徒への指導及び評価上の配慮の在り方について2回にわたりヒアリングや意見交換を行った。
- その中では、学習上の困難さ、集中することや継続的に行動をコントロールすることの困難さ、他人と社会的関係を形成することの困難さなどの状況ごとに、困難さの状況、道徳指導上の困難、指導上の必要な配慮事項などについての意見があった。具体的には、他人との社会的関係の形成に困難がある児童生徒の場合であれば、相手の気持ちを想像することが苦手で字義通りの解釈をしてしまうことがあることや、暗黙のルールや一般的な常識が理解できないことがあることなど困難さの状況を十分に理解した上で、例えば、他者の心情を理解するために役割を交代して動作化、劇化したり、ルールを明文化したりするなど、学習過程において想定される困難さとそれに対する指導上の工夫の必要性が報告された。具体的な内容は「別紙4」のとおりである。
- また、評価を行うに当たっても、困難さの状況ごとの配慮を踏まえることが必要であり、前述のような配慮を伴った指導を行った結果として、相手の意見を取り入れつつ自分の考えを深めているかなど、児童生徒が多面的・多角的な見方へ発展させていたり道徳的価値を自分のこととして捉えていたりしているかを丁寧に見取る必要がある。発達障害等のある児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握するため、道徳的価値の理解を深めていることをどのように見取るのかという評価資料を集めたり、集めた資料を検討したりするに当たっては、相手の気持ちを想像することが苦手であることや、望ましいと分かっているとおりにできないことがあるなど、一人一人の障害による学習上の困難さの状況をしっかり踏まえた上で行い、評価することが重要である。

《道徳授業は か・き・く・け・こ》

～「主体的・対話的で深い学び」の実現へ～

「～べき」タイプの授業（指導者ばかりがよくしゃべる） → べきべき壊れる授業

↓
「～たい」タイプの授業（児童生徒が主役、聴きたい語りたい考えたい） → 大切にしたい授業

道徳授業における「わかる授業」（→「学びがいのある授業」）とは
道徳的価値・人間としての自己の生き方についての自覚へ

自己の生き方・人間としての生き方という観点から

- ① 自分がわかる（時として気付いていない自分の感じ方・考え方等がわかる）
- ② 他者(人間)がわかる（自分以外の人の感じ方・考え方・生き方等がわかる）
- ③ 道徳的価値がわかる（人間として生きていく上で大切なことがわかる）

聴ける・語れる・深く考えられる 集団

有意義な道徳授業を創造するには  以下の「かきくけこ」を授業の中に！

か 感動・葛藤（価値葛藤・心理的葛藤） → 考えたくなる
語り合い（←話し合い） 考える必然性のある問い 《改善》

き 共感（的理解）・疑問・気付き・驚き（既成概念・価値観くだき）
聴き合い 協働 共育（共に考え育つ・共に育てる）

く 食い込み（なぜ？どのように？等を大切にした重層的発問、反問教師）
児童生徒の言葉を生かす（←問い返しでさらに深く!!）

け 経験（児童生徒一人一人の具体的生活）の振り返りと活かし 《検証》

こ 交流（多様な感じ方、考え方）（授業は生きもの）こだわるな!